

古文書から電子ジャーナルまで



中 根 貞 幸

図書館は、今、劇的な環境変化の渦中にある。インターネットの波が押し寄せて、その波に吞まれてしまったからだ。大学はネットサーフィンを楽しむ若者を受け入れるようになったが、附属図書館もその重要な施設としてそれに相応しい生態環境を確保し適応していかなければならない。アメリカの詩人マックリーシュは、図書館のない社会は想像できないと30年前に語ったが、それはデジタル情報を運ぶウェブ(Web)が誕生する前のことだ。今では、図書館もうまく波に乗れなければ、溺死してしまうかも知れない。

本館の狭隘さはひどいものである。分野によっては書架からはみ出た本が通路に積まれている。古本屋ならともかく学問の府では許されることではないが、冷厳たる事実なのである。この惨状を目にすると、一所懸命に教育研究の支援に努めている館員の無力感や屈辱感が伝わってくる。利用者の目にはただ乱雑で荒廃しているとしか映らないのではないかと心配である。

図書館のこの窮状は書庫スペースの絶対的な不足によって説明される。34万冊の収容能力しかないのに、蔵書数は46万冊である。12万冊は教員の研究室にある計算となる。それでいて、毎年約1万冊が増えていくのだから、本が収納架から溢れるのは当然のことである。このような状態からどのように脱却するかは、殆どの大学図書館において課題となっている。冊子体資料の増大は現代が抱える大問題の一つであり、それが図書館に最も顕著に表れていると言っても過言ではない。本館では集密書架の増設で急場を凌いでいるが、近い将来、抜本的な改革を迫られる。

図書館内の有限な物理空間を尻目に、サイバースペースはどんどん膨張している。この空間には莫大な量の情報が蓄積され、飛び交っている。その情報は学術的であるとは限らない。その上、学術的且つ有意義な情報の多くは有償であり、個人では容易に入手できない。図書館は本や雑誌を購入し、保存して、情報提供を行うという従来のスタイルを放棄できないし、またすべきでもないが、今はインターネットによる情報伝達に対応するために様々な道を模索する時を迎えている。

今の図書館は、いわば学術情報を貯えるデジタルの大海原に利用者を送り出す港でなければならないと思う。港というよりも、その三次元世界へのポータル(入口)であればいいのかも知れないが、質の違いはあれ、港のような活気と寛ぎを与える空間であるともっとよい。従前、学術情報を冊子体で提供できる場たることが図書館の主な使命であったが、これからは、サイバースペースへの船出を助けることも重要な任務となる。だとすると、図書館員に求められるのは情報収集・検索の専門的知識と高度な技術を具えた優れたナビゲータとなることである。

本館所蔵の図書や雑誌に関する書誌情報へはオーパック(OPAC)や目録カード検索システム(OCC)でアクセスできるし、国立情報学研究所(NII)のNACSIS WebcatやWebcat Plusを通じて、全国の図書館資料の情報が得られる。このようなサービスは本館のポータル機能であると言えるが、OCCは別にしても、どこの大学図書館でもやっていることである。平成14年度には、これらの他に次の3つが本館の新たなポータル機能として

加わった。

- ・ 有料電子ジャーナルの提供
- ・ 教育地域科学部の紀要のウェブ公開
- ・ 小島家文書のウェブ公開

国際社会でも地域社会でもインターネットは情報伝達と情報検索の最強ツールとなった。OPAC や NACSIS Webcat が誕生する以前では、自分が求める本の所在を知ることさえ難儀であった。館内の目録カードを繰ったり、国立国会図書館の蔵書目録や新収洋書総合目録、あるいは大学図書館が出す蔵書目録などを調べてみなければならなかった。今では、NACSIS Webcat によって、求める学術書が一瞬にしてどこの図書館にあるかが分るのである。しかし、それが日本国内にあるとは限らない。

そのような時、私の場合はまず、Library of Congress Online Catalog (<http://catalog.loc.gov/>) や The British Library Public Catalogue (<http://blpc.bl.uk/>) で調べてみる。そこで見つかったとしても、そう簡単にワシントンやロンドンまで行けないので、実物を手にすることは容易ではない。しかし、これらから得られる書誌情報は貴重である。

さて、実物を手にしたい時は、古本で出回っているかどうかインターネットで探せばよい。購入するとなるとカード決済となるので自費になるが、アメリカやイギリスまで出掛ける費用を思えば安いものである。ある時、Goold Brown, *The Grammar of English Grammars* (1851)の初版本が売りに出ているので、書店にメールで本物かどうか確かめてから買うことにした。この本の改訂版は日本の大学図書館に沢山入っているが、初版本は見つからない。以前、ある論文を書いていた時に、この初版本が参照できなくて困ったことがあった。本物だとのお墨付を Scallywag's Used and Rare Books から貰って購入した。厳重に梱包された箱から薄汚い

本が出て来たのを妻が見て、眉を顰めて、「何それ。陽に干してから使ってね！」と誠につれない。日光消毒を求める気持は分らないが、総革装で150年もの本を陽光に曝すなど狂気の沙汰である。汚いことは事実だが、私の目には奇妙に美本と映る。こっそり日干しにされないうちに研究室に避難させた。初版であることは間違いなさそうだが、本物を見たことのない悲しさで、確証がない。そこで、BLPCにアクセスして検索してみると、さすがにちゃんと初版本が所蔵されていた。その書誌情報と照らし合わせると、総ページ数が違うではないか。購入した本をじっくりみると、最後の1葉が欠落しているようだ。付録の一部なので学術的に問題があるわけではない。売主もこのことは知らなかったのだろう。このように欠陥がないわけではなかったが、これで初版本であることが確かとなった。これも大英図書館が誰にでも所蔵資料に関する情報を開放してくれているお陰である。

私はインターネットでの古本購入をもうやめられない。やめられないのは電子ジャーナルも同じである。これほど迅速性、利便性、省スペース性に優れた雑誌形態はないからである。本館が昨年4月に2000誌ほどの有料電子ジャーナルを導入してから10か月以上が経つというのに、まだその値打を知らない研究者や学生がいるのは残念なことだ。図書館ではポスターを貼ったり、図書館ニュースで講習会の通知をしたりして宣伝に努めているが、いまだ電子ジャーナルの使い方はおろかその存在さえ知らない人もいるようだ。ブラウザでインターネット・サーフィンに興じる院生ぐらいなら、電子ジャーナルへのアクセス方法を教え、使い方を少し指南してやると、その凄さに驚嘆してどんどん使うようになる。若者は実に柔軟で適応力がある。

教員はというと、自発的に使う人も多いが、

中にはPDFが開けないとこぼす人もいる。そういうこともあるので、電子ジャーナルはHTMLファイルやテキストファイルでも供給されている。しかし、PDF (Portable Document Format) は、OSやプラットフォームの違いに拘らず、元ファイルの形をそのまま再現できる優れたファイル形式であるので、これを利用しない手はない。そんなものいつまでもつかと冷笑的な態度を示す人もいるが、私は好きなので進化して生き延びて欲しい。

今年のクリスマスのことである。カナダの知人にクリスマスカードの代わりにエッセイを送ることにした。言語学者ではないが、語学的な知識はある人なので、英語の発音変化に関する少し専門的なエッセイにした。ただ、相手はウインドウズ、私はマックという環境で、内容的にも国際音標文字 (IPA) を使う必要があったので、フォントはすべてPDFファイルに埋め込んで電子メールに添付して送った。こちらは26日の午前になっていたが、カナダはまだ25日のはずである。私はやれやれと思って安らかな眠りに就いたのだが、相手はそれどころではなかったようだ。その添付ファイルが開けないので、息子さんに応援を求めたら、MS-Wordのリッチテキストか WordPerfect のファイルで送り直してもらおうよう進言されたと言って来た。しかし、そのどちらも私が意図するようなファイルにならないことは明らかなので、Acrobat Reader 5 をインストールしてファイルを開いて欲しいと返信した。私が示した手順どおりにしたら、見事にファイルが読めたとメールが来た。6回も読み直すほど感激してくれて、親類やら友人やりに送ってくれたそう。このように一旦その有意さ便利さを覚えると手放せなくなるのはPDFも電子ジャーナルも同じである。

学術情報の収集を手助けするだけが大学図書館の役目ではない。大学の学術的所産

や図書館所蔵資料を学外に開放していくもの重要な使命である。平成14年度には教育地域科学部の紀要論文をPDFファイルで公開することができた。NIIも全国の国立大学の紀要論文をPDFにしてアーカイブを作ろうとしている。但し、NIIは論文を画像として取込み、それをPDFにするので、文字情報を取り出すことはできない。本学の場合は、文字をコピーできるような形のものであり、プリントアウトしても鮮明で、より活用しやすくなっている。

本館が寄託を受けて30年近く保管している小島家文書がある。これは近世史や郷土史の研究に重要な古文書である。希望者には閲覧を許可してきたが、古文書は貴重な原資料であるので、閲覧許可には細心の注意が要求される。それがより多くの研究者に裨益するためには、マイクロフィルムに撮って保存し、さらにそれからデジタルファイルを作って公開できるとよい。そうすると貴重な資料の保存と公開が一挙にでき、正に一石二鳥である。この度、寄託者小島武郎氏のご好意と学長裁量経費のお陰でこれが可能となった。

このように、附属図書館はその巨体を引きずりながらも、電子図書館への脱皮を試みている。ドードー (dodo) という鳥のことをご存じであろう。棲息環境の変化に適応できずに17世紀の後半に絶滅した飛べない鳥である。モーリシャス島では、わずか80年ほどの間にその悲劇は起きた。これから80年先のことは分らないが、附属図書館はサイバーウイングを獲得して、情報の大海原を飛翔しているかも知れない。どのような姿になっているか想像するのは楽しいことである。

(なかね・さだゆき 附属図書館長)

図書館に対する提言 - 個人的な経験から -

岡崎 英一

福井医科大学との統合、さらには独法化をむかえ、福井大学でも大学図書館のあり方について、様々な検討が行われている。これから大学図書館が今後どうなるかということについては、正直なところ、教育地域科学部の図書館委員になるまでは考えたこともなかった。図書館委員になって、耳学問で幾つかの言葉を知った。その中のポータル機能の強化や電子図書館化、はたまた情報処理センターとの融合などが、福井大学図書館の未来像を語るキーワードなのであろう。今後、福井大学図書館もどんどん変わっていくことが予想される。このような時に、せつかく図書館の広報誌「かりん」に書かせていただけるチャンスを与えていただいたのだから、やはり今後図書館はどうあるべきかということ、自分の立場から提言をすべきであろう。

大学の図書館とのつきあいは、私の大学の入学時点にさかのぼる。取り立てて目的もなく、なりゆきで都会のマンモス大学に入学したのであるが、スポーツが苦手で、特に友人もなく、金もなかったため、とりあえず大学に通うものの、大学に居場所と呼べる場所はあまり見つけれなかった。

その大学の中心に図書館があった。郊外に移転したばかりの実に立派なその建物は、食堂とともに大学の中心にあった。大学に通う学生達は、大学の入講ゲートを通ると、ガラス越しに図書館の中を見ながら、各学部の建物へ行くような配置になっていた。図書館の正面玄関をはいるとすぐそこに、何か有名な法典の原文のレプリカがおかれており、高い天井と広いエントランス空間は美術館のようで、そこはかたなく知的な空間作りのための配慮がしてあった。静かな中にも、何かこ

れまでとは違う雰囲気を持つ場所、ということを感じていたが、いつも通がけにガラス越しに見ている場所であり、私のような新入生にとっても、暇つぶしのためでも入りやすい雰囲気も持っていた。

図書館に入る私の目当ては、まずは新聞、雑誌であった。金がないため、ここでその要求を満たした。さらに時間があれば小説を読んでいた。この図書館で開架書棚には、夥しい数の本があった。そこで暇さえあれば本を読んでいた。別に教養を高めるような本ではない。まさに暇つぶしである。大学生らしく岩波でもということも、年に数回しかなかったが、私にとって、図書館は東京に来てからの数少ないくつろげる場所であった。ある書棚の陰の机、そこがお気に入りの場所であった。朝、大学に来る、まずそこへ来て、鞆を下ろし、それからおもむろに講義に出かける。講義がないときはそこで本を読んでいた。このころは、大学に行くと言えば、図書館に行くことだったように思う。

ある時、そんな僕に話しかける人がいた。姿から大学の先生と想像していた。

その人は、「君はいつもここで本を読んでいるね」

「はい」

「おもしろいかい」

「はい。いや、いいえでしょうか。暇つぶしなんで」

「そうか。暇つぶしか。いいな、暇つぶしに本が読めるなんて」

「え、先生はそうじゃないんですか」

「だって僕はそれが商売だからね」

「なるほど。で、先生は本を読むのはおもしろいのですか」

「おもしろいよ。うん実にいい商売だ。でも本を読むのがおもしろいということよりも、何か新しいことを知ることが楽しいのだけだね。そのスタートラインが本というわけだ。」

「新しいことを知ることですか。」

「だって君はそのために大学にきたんだろう。」

「ええ、でも授業はつまらなくて。」

「授業も、新しいことを知るためのきっかけだよ。それから先は君しだいさ。本もまた同じさ。知るためのきっかけだよ。」

「なるほど。」

「ねえ講義室ばかりではなく、ここも大学だよ。何か知るためのきっかけを与えてくれる場所だよ。君はそれを利用しているかい。」

不確かだが、そんな会話をした記憶がある。暗い、いかにも田舎じみた学生が、無為に時を過ごしていることを哀れんでくれたのだろうか、その人はひとしきりそんな話をしてくれた。その人が著名な言語学者であることは、それから数年後、その人の記事が新聞に載った時に知った。

この会話の後でも、図書館を、知ることのスタートラインとして十分に利用していなかった。相変わらず、新聞と雑誌と小説との毎日であった。でも、なんとなく、知ることを商売とするのもいいかと考えるようになったし、少なくとも自分がこれから知ることべきことは何かを考えるようにはなった。たぶん、これが研究者をめざそうという最初のきっかけだったように思う。

そして何年かたって、大学院で研究活動に入ることになった。そして、それにつれて図書館のもう一つの顔を知ることができた。それがレファレンスサービスであり、書庫であった。

資料がどこにあるかわからない時、そんなときにレファレンスルームに相談に行く。顔をつき合わせて、ああでもない、こうでもな

いと調べて、その資料を探し出してもらえる。図書館って、こんな便利なところかと、あらためて驚いたことがある。これなら学部の卒論はもっと効率よく書けたのにと。また書庫に入庫が許可されるようになって、書庫を歩きながら、様々な資料に触れることの楽しさにも驚かされた。経験してみないとこの楽しさは理解できないであろうが、書庫に潜り、ひたすら資料をあさる作業。これが実に楽しい。またこの書庫あさりで、自分の専門とは別の分野で、おもしろい資料を発見し、しばらく研究を放擲して、その資料を読みふけるなどという楽しみもあった。

もちろん普段は、研究に役に立ちそうな資料を探し、よさそうなものは概略をよみ、役に立つと判断したらコピーするという作業をおこなっていたわけである。大学院生も、コピー代のいくらかは大学から補助が出たが、当時の私の財政状態ではコピーは高い支出であり、できるだけ少ない数で済ませたいと考えていた。だから、書庫でできるだけその資料を読み、そしてコピーして良いかどうかを必死で考える。そして本当に必要なものだけコピーしていた。皮肉なことにコピーした資料はなかなか読まない。どうも書庫で読んだことが一番役に立っていたようである。どうも書庫そのものが私にとっての研究室だったようである。

この図書館の新たな楽しみに触れるたびに、どうもこれまで図書館の半分しか知らなかったらしいと考えていた。そして、そう考えるたびに、なるほど、図書館はいろんな意味で、知ることのスタートラインなんだと、かの先生に聞いた話を思い出していた。

これが私の図書館とのつきあいである。私の乏しい経験ではあるが、講義室や実験室だけでなく、図書館も、大学という「知」の活動のスタートラインの一つなのだと、ということが言えそうな気がする。そして、おそらく、この点は、図書館がどんなに改革

されようとも、これからも変わらないだろうとも。

思い出話ばかりして、本題の提言をする前

に紙面がつきてしまった。今更ながら要領の悪さを嘆かざるをえない。

(おかざき・ひでいち 附属図書館委員)

学術雑誌の電子化と価格高騰

田 嶋 直 樹

この3年ほどで福井大学のネットワーク環境は見違えるまでに改善されました。以前はクラッキング行為などによる通信渋滞・途絶が長時間にわたり頻繁に起き、電子ジャーナルなどはアクセスの権利があっても満足にダウンロードできないことが多かったのですが、セキュリティ対策や回線容量増強などによってか、最近では何カ月もの間ストレスを全く感じずにネットワークの恩恵を享受し続けていることに気づいて感慨深いことがあります。

以下ではこの情報環境の改善にあわせて充実させていきたいソフト面に関連して、学術雑誌の電子ジャーナル化と、それとともに進んできた購読料の高騰の問題について、雑誌代に苦しむ講座の一員として、また、この2年間務めた図書館委員として考えたことを述べてみたいと思います。

学術雑誌は研究の重要なインフラであり、大学間での教員の流動性を高めるためにもなるべく多くの大学で同じように利用可能な状況にすることが理想です。

私の研究分野に関しては、十年くらい前までは、主要な雑誌の価格は福井大学の規模であれば十分に購読できるレベルでした。大都市圏の小さい私立大学でのみ、買えず・買わずに近隣の大きな大学に読みに出かけるということはあったようです。ところがその後、主要な雑誌の購読料が何倍にも高騰し、福井大学の規模ですら購読が難しい状況になってきました。

この高騰のきっかけが雑誌の電子ジャーナル

化にあることは、異論の余地がありません。最初私は、雑誌の出版が電子化されると価格が下がるだろうと期待しました。それは原稿がコンピュータファイルとして投稿されるが増えるので活字を組む手間が省けるなど出版に必要な経費が抑えられるはずだからです。ところが実際には逆に、ほとんど毎年10%、20%という大幅な値上げの連続となりました。出版社の内情は知らないので想像ですが、値上げの原因は電子化のための投資(設備の購入・維持、バックナンバーの電子化作業)であり、その値上げによる購読者数の減少をさらなる値上げで埋めあわせてきたのだらうと思われれます。

この高騰の影響は深刻です。例えば私の属する講座では8人の理論物理系教員で予算をプールして使っていますが、今年の場合、校費の配分が650万円のところ、学術雑誌に550万円を支払っている状況です。昨年度までの赤字が120万円累積しているので雑誌以外の支出はすべて赤字を増やすことで調達していることになりました。

10年前はもっと沢山の雑誌を購読しても予算に余裕があり、その余裕を、例えば、研究の参考書や工学部の専門基礎教育の資料として書籍を購入するのに役立てていました。私が4年前に福井大学に転任してきたときには、そうして集めた本で一杯の講座の図書室を見て感激しましたし、2年前にポスドク学振研究員が来たときも福井大学にきて一番嬉しいのは講座の図書室であるとの感想でした。ところがその後は

雑誌価格の高騰で、赤字が大きくなるたびに雑誌数を減らしてやっとしのいでいる状況で、図書室の蔵書はほとんど増えていません。計算機すら買い替えることができず、学振の人に科研費で買ってもらうありさまです。

この財政的な問題を電子ジャーナルが解決するかというと、残念ながら全く解決にはなりません。雑誌が高騰したので電子ジャーナルで代替しようという作戦は見当がはずれていて、電子ジャーナル化のために紙媒体も電子媒体も通じて購読料が高騰して困るという話なのです。詳しく言うと、電子ジャーナルの提供を受けるには（過渡期にあるため条件は短期間で変更されるかもしれませんがさしあたり現在は）ある自然科学系学術雑誌の大手出版社を例にとると、大学全体での紙媒体の雑誌購入総額を維持することが最も重い条件となっているからです。福井大学全体でこの出版社への支払い額のノルマは1300万円に上ります。

私の講座の例にもどると、この出版社に年間400万円以上支払って、実質6人の読者しかいない素粒子・原子核物理関係の雑誌を購読していますが（なおこの雑誌に格安の個人購入レートはありません）、もしこの購読を中止すると大学全体でこの出版社の電子ジャーナルが一切利用できなくなるという状況なのです。大学の共通経費で400万円分、他の雑誌を買ってくれば我々は嬉しいのですが（読みたい雑誌は電子ジャーナルのパックの中に含まれている）そういう考えで購読中止が相次ぐと最終的には他の出版社の分も含む全学術雑誌の共通負担化に4000万円が必要になることでしょう。福井大学の予算規模は9億円と聞きましたが、その5%の捻出は全学的には承認され難いと思われる。

ところが、一方では、電子ジャーナル化により、予算が楽になったという大学の話も耳にします。例えば、京都大学では上記の雑誌の重複購読を整理して理学部での購読に一本化し、他の部局は電子ジャーナルで代替したところ、何百万円も予算が浮いたという話を聞きました。

東京大学でも理学部での購読継続のおかげで予算の少ない教養学部で購読を中止できて財政的に救われたという話が伝わってきました。

なぜ大きな大学では購読総額が減額できるのか理由が判然としないのですが、6人で読んでも120人で読んでも同じ値段という、規模の小さい大学にとって非常に不公平な価格体系になっているのではないかと心配です。さしあたり、国立大学全体がまとまって、ねばり強く出版社と交渉を続けてくれることを切に望みます。

交渉の部外者である私は具体的な話題はこれ以上持ち合わせていないので、次に一般論として、学術雑誌はどうあるべきかの理想を述べてみましょう。それは単純な料金システムをとれということです。

そもそも学術雑誌は公共性の高いものですから、バザールでの買物のようにいちいち値切り交渉をして買わねばならないような売り方をすべきではありません。過渡期・混乱期によく見られるような非効率的な商習慣からなるべく早く決別したいものです。

たとえば、電車の切符は買い方を工夫してもせいぜい何割かしか値段は変わりませんが、海外航空券はかつては正規の買い方をすると月給2、3カ月分の金額を払わなければならないのに、まとめ買いをバラして売っている業者から買うと一桁安くなるというような非常に不合理な流通の仕方をしていました。インターネットの発達で、最近は直接に航空会社のウェブサイトからかつての格安チケットなみの運賃で航空券が買えるようになりましたが、インターネットはまさにそのように不合理な価格体系を排除するためにこそ活用して欲しいものだと思います。

個人も大口も、閲覧1件あたりいくら払うという徴収システムにすることは、誰でも所属に関係なく人類の共有財産である学術論文にアクセスできるようになるという点でも理想的な方式だと思います。

そのようなシステムが機能するためには、違

法コピーをしないという倫理の確立、その前提としての安価な閲覧料金の設定(技術的手段でのみ違法コピーを根絶することは無理があるので、料金を安くすることで衣食足りて礼節を知ってもらふ)、また、ネットワーク上での支払いシステムの世界的規模での確立などが前提となるので、十年後でも実現できるかどうか確かではありませんが、当面の混乱に対処していくにあたり、理想のビジョンを持つことは必要だと思えます。

結論として、学術雑誌に関する大学附属図書館の役割は、当面の混乱状況に対しては臨機応変に対処していくリーダーシップをとることと、将来的には大学図書館をバイパスして直接出版社にアクセスし大学の研究費から論文1件ごとに支払うようなシステムを目指し、それが機能し始めたら身を引くということになります。

図書館の役割は他にも数えきれません。教養教育の最重要基盤としての開架図書の実、自習スペースの提供、大学の発信する知的情報の整理と管理など、お願いしたいことが何件もすぐに思いつきます。大学全体がまだまだ図書館を大きく育てていかなければならないと思えます。

ところで図書購入費について立ち入った話を述べたついでに、「教員への特別貸出」について説明しておきたいと思えます。特別貸出の図書

とは図書館蔵書のうち研究室に配置にされているもののことですが、昨秋の「図書館利用に関するアンケート」でよせられた意見の中に「特別貸出の制度をやめてほしい、特別貸出の本は教員の私有物になっている」に類した意見がいくつか見られましたので、誤解を除くため制度の意味を説明しておきたいと思えます。国立大学では購入した書籍はすべて大学附属図書館の蔵書として登録されることになっています。教員が自分の研究費で研究や教育の資料となる本を買っても書類上は図書館の蔵書になる仕組みです。これは、なるべく本は融通しあって研究費を節約しよう、また、お互いに入手の困難な資料を貸し合って助け合おうという趣旨だと思います。しかしその購入に使われた研究費は、本を買うのではなく実験機材を購入したり、アルバイトを雇ったり、パソコンを買ったりすることもできるお金であり、それを節約してわざわざ買った本なので、開架にある図書とは性質が違い、それなりの理由があってこそ借りるべきものです。前任の大学で、大学院生が見ず知らずの研究室から本を長く借り出したままにしたため、返却を催促する電話がかかってきて申し訳ない思いをしたことがあります。どのような立場で借りるかを理解した上で借りるようにしてこそ制度が円滑に機能すると思えます。

(たじま・なおき 附属図書館委員)

クリティカルシンキングを鍛える

寺尾 健夫

騙し商法は遠い存在と思っていたが、いまや大学関係者こそがこの商法の標的にされているのではないかとも思われる。福井大学ですでに被害にあった学生の事例をいくつか耳にした。巧妙な騙しのテクニックに対処するためには、私たちは合理的な判断や意志決定の基礎となるクリティカルシンキングを日ごろから鍛えておく必要があるだろう。

ところで商品の売り込みは、ダイレクトメールや電話、それに近年では電子メールを通してやってくる。先日大学の筆者に宛てて「あなたに300万円相当の自動車が当たりました！」と告げるダイレクトメールが届いた。読み進めると、この当選を有効にするには日までに2万円を指定口座に振り込むように指示してある。おそらく送り主はそのほとんどが無駄になることを承知で膨大な数のダイレクトメールを郵送し、百分の一あるいは三百分の一の割合で応募者を射止め、確実に利益を得ているのであろう。大きな利益の獲得には相応のリスクを求められる。微少な投資で巨額な利益が楽々得られるなど常識ではあり得ないのにこのような広告に応募してしまうのはどうしてなのか。人はどうして騙されるのだろうか。

騙しの広告は私たちの身のまわりに無数にある。単純なものでは財布やプレスレットなどの開運商品などがある。さらに新聞やTVで流されてくるお馴染みのビールの広告などでもトリックが多用されている。例えば10人の中の7人がわが社のビールが一番美味しいと判断したとアピールしていてもその調査方法は明示されていない。極端な場合、もともと当該のビールが好きな人ばかりを被験者に行っていることも考え

られるのである。

このような日常的な騙しにも対処できるクリティカルシンキングの入門編として、まずダレル・ハフ著(高木秀玄訳)『統計でウソをつく法』(講談社ブルーバックス)を勧めたい。1968年以來のロングセラーで統計の出所、調査方法、隠されている資料など、私たちの身の周りにおける統計的な騙しのテクニックとその見破り方がわかりやすく書いてある。

次に事例編として、菊池聡・谷口高士・宮元博章編著『不思議現象 なぜ信じるのか』(北大路書房、1995)を勧めたい。この本は、騙し商法はもちろんのこと、迷信、権威、流言など人がなぜ「不思議現象」を信じてしまうかを心理学の立場から事例を通して分かりやすく解説したものである。ちなみに騙し商法の類型としてはキャッチ・セールス、アポイントメント商法、デート商法、催眠商法、靈感商法、ホームパーティ商法、マルチ商法、さむらい商法などがあげられ、騙しや催眠のしくみが説明されている。ちょっと堅いがT.ギロピッチ(守一雄・守秀子訳)『人間この信じやすきもの 迷信・誤信はどうして生まれるか』(新曜社、1993)もためになる。

クリティカルシンキングにもっと興味をもった人には理論編、実践編としてE.B.ゼックミスタ・J.E.ジョンソン(宮元博章・他訳)『クリティカルシンキング 入門編』(北大路書房、1996)、同『クリティカルシンキング 実践編』(同、1997)を勧めたい。クリティカルシンキングとは日常生活の中での「ものの考え方」のことである。入門編では思考を支える40個の原則(クリシン原則)が、実践編では50個の原則

が紹介されている。これらの本は、私たちが日常生活で主体的、合理的に行動していくために考える力としてどのような思考の原則を持ち合わせていけばよいのかを網羅し、その全体像を見えるようにしてくれるとともに、日常の具体的な場面でそれらをどのように応用すればよいのかを具体的に示してくれている。若い学生の時期にこそ一読して欲しい本である。

最後に拡張編として川上和久『情報操作のトリック その歴史と方法』（講談社現代新書、1994）を勧めておきたい。イラク情勢をめぐるアメリカ政府の発言、北朝鮮の言動を見ても分かるように、情報の中でも特に政治支配や国際

関係、経済活動に関する情報には必ず送り手側の操作がある。さらに情報はマスコミによる操作も加わって私たちに伝わってくる。人がマスメディア情報と賢く付き合っていくことはクリティカルシンキングの中核的な要素とも言えるものであり、この本にある社会的レベルの思考技能も深めてもらいたい。

筆者は共通教育で「社会と試験」の授業を担当しているが、社会における試験はまさにここで紹介した本にあるようなクリティカルシンキングの質を問い、鍛え上げるためのものと考えている。

（てらお・たけお 共通教育第六部会長）

読みたい本と読むべき書

埜村 守

朝、目覚めると玄関の新聞受けへと走る。印刷インクの匂いがほのかに残る真新しい新聞を小脇に抱えて再びベッドに潜り込み小1時間、広告欄も含む総ての紙面に目を通す。これが私の一日の始まりであり、ささやかな楽しみのひと時でもある。ところが、最近の紙面にはどうも腑に落ちない論調が多くて、この楽しみもいささか減じる。その一つが、昨今の経済停滞の解消策としての「モノの消費の拡大 生産活動の活発化 経済成長」という相変わらずの主張である。これ以上の消費は浪費とさえ思えるのに、である。このような議論で思い起こすのが、小生が福井大学に赴任した頃に読んだ「成長の限界」という書である。こちらへ赴任した頃は、大学紛争の余韻と公害の広がりから学生の社会問題への関心は非常に高く、授業の中でも「環境汚染が進む中で人類はいつまで生存可能か？」などと学生達と真顔で議論したものである。ちょうどその頃タイミングよく現れたのが、上述の「成長の限界」（ローマ・クラブ「人類の

危機」レポート）、という書物であった。この書は、私的な国際団体であるローマ・クラブが「このままの勢いで経済が成長し、資源が消費され、環境が汚染されていった場合に、はたして地球はいつまで人間の棲息を保証しうるか」という問題意識から、これらの相互作用をシミュレーションモデルを用いて解析した結果をレポートとしてまとめたものである。結論は従来のような地球が無限であることを前提とした経済成長は地球を破滅に導くというもので、当時の人々の成長信仰に180度の意識転換を迫るものであった。そのころの日本は、経済成長のまったただ中であって、環境汚染も急速に進行していたことから、このような状況がいつまでも続く訳はないとぼんやりと思っていた自分にとってこの書の結論は「目からウロコ」の思いであった。書にも述べられているように、科学技術の進歩は成長の制約となる諸問題を必ず解決するだろうという技術的楽観主義から、この書の見解には反論も多いという。しかし、「この技術的楽観

主義こそが、本書の結論から目をそらさせ、解決策として有効な行動を取ることを妨げる最も一般的かつ危険なものである」と述べ、さらに、「進歩に盲目的に反対するのではなく、盲目的な進歩に反対する」と述べているが同感である。そして、人類が生き延びる道として均衡状態における成長を挙げている。すなわち、均衡状態では物質的生産量は本質的に（必要量に）固定されるので、技術進歩がもたらす生産方法の改良は、教育、芸術、音楽、宗教、基礎科学研究、スポーツなどにあてられる余暇を増加させ、これらの非資源消費的、非環境汚染的な活動を無限に成長させることになるという。例えば、ハーバード大学の名誉教授であるガルブレイスも去る1月24日の朝日新聞紙上で「日本では相変わらず国内総生産（GDP）の拡大や雇用の高さを維持することだけが重視されているが、日本のように経済が成熟化した国では卓越性を測る新しいモノサシが必要だ。GDPが大きく

なった結果、自分たちの生活が深く多彩に楽しめるものになったか見直してみるべきだ。日本で、オペラやオーケストラの質向上が真剣に議論されているだろうか、芸術、科学、スポーツ、教育などがもっと投融資の対象になっている。働くことが人間の最終目標でもなかるう。たとえ失業状態でも豊かさを感じる社会作りへと、施策の視点を変えるべきだ。この発想の転換の面で日本は世界のリーダーシップを取ってもらいたい。」と本書と同趣旨の意見を述べている。

このように、本書の主張は今なおその新鮮さを失ってはいない。確かにこの書は多くの人にとって読んで面白い、読みたい本とはいえないかも知れない。しかし、“地球の有限性とその上での人間の生存と活動の限界”を明確に指摘し人々の意識転換に大きな役割を果たした歴史的な書として本書は読んでおくべき教養書の一つに数えられるであろう。

（のむら・まもる 共通教育第八部会長）

随筆から学ぶ

香川喜一郎

自分の好きな本について語ることは、自分の思想・人生観をある程度明らかにすることであり、できたら避けたいところだが、図書館より依頼され、自分の高校時代から今まで、特に自分に影響を与えてきた本について簡単に述べることにする。

私は本をよく読むといったタイプの人間ではない。ほとんどの時間は、自分の研究について、ああでもない、こうでもないと考えて時間を過ごすことが多く、本を読むような時間はあまりない。たまに、自分の気持ちが沈み、何かをやるうとしても気持ちが高揚しないときがある。そんなとき、本屋をのぞき、その時の自分にピッタリ合った本がないものかと、探すこと

もある。しかし、そんな本はそう簡単にあるものではない。結局、また昔からの“座右の書”を眺めることになる。

私は、広島県と島根県との県境に近い山間部で高校時代を過ごした。少人数の僻地高校であるから、高校を卒業すると皆就職し、大学進学などするような生徒はほとんどいなかった。ラジオ講座などを頼りに一人で受験勉強をやっていたが、自分の将来の進路についてあれこれ悩む時期であった。そんなとき、本田技研工業の創業者本田宗一郎氏の自叙伝でもある「得手に帆あげて」を読み、大変感動し、かつ勇気付けられたことを思い出す。当時の初版は今では手に入らないが、最近、三笠書房から同じタイト

ルで少し形を変えて出版されている。これはどの学生にも、是非、読んでいただきたい本である。その本の中で、彼は「人間が人間らしく生きる最高の方法は、自ら自分の個性を開発し、個性の特質を充分生かして生きることだ」と述べている。

高校時代、理系のどの方面に進むか随分と迷ったが、ガモフ全集の中の「物理の伝記」を読んだのがきっかけで、結局、大学は理学部物理学科を選んだ。そのころ朝永振一郎博士が日本人として二人目のノーベル物理学賞を受賞され、間もなく、博士の随筆集である「鏡のなかの世界」が世に出た。その本の中の「滞独日記」は何度読んでも味わいがある。この本を始めとして、私は科学者の書く随筆を好んで読むようになった。当時、学生社から科学随筆全集というのが出版されており、いろいろな分野の人の随筆を読むことができた。「病院の窓」、「化学の四季」、「数学と人生」、「物理学者の目」などは今でも私の本棚にある。その後、国内でこのような科学随筆集は出版されていないのではないかと思う。これらの本は、市立や県立の図書館に行けばあるであろう。工学部や、教育の理数専攻の学生は、これらの随筆を読み、明治から昭和の時代にわたって日本の科学技術を築き上げてきた、偉大な先人の精神の一端に触れていただきたい。

自分が大学一二年の頃は、前期・後期ともに試験期間がかなり長かった。多分3週間ぐらいかけて試験が行なわれていたと思う。その試験時分になると、試験勉強があるにも拘わらず無性に小説が読みたくなり、日本文学全集や世界文学全集などを読みふけたことを思い出す。その経験は大いに役に立っている。科学技術も大切であるが、それにも増して、人間尊重、つまりヒューマニズムを守らなければならないという思想を身に付けることができた。是非、若

い時期に多くの文学に触れていただきたいと思う。

大学の専門に進むと、実験や演習のために文学など読むことはできなくなったが、寺田寅彦集はいつも手元において、よく読んでいた。彼の藪柑子集の「団栗」などは文学的にも優れたものであり有名であるが、備忘録の中の「向日葵」、「線香花火」なども大変素晴らしい。明治

大正 昭和初期と寺田寅彦が生きた時代、日本の多くの科学者は、西洋の科学技術をいかに吸収し、追いつくかということのみに専心していた。しかし、彼は、日本独特のオリジナルな研究の大切さを主張した。彼のそのような思想が前述の「向日葵」や「線香花火」の随筆の中に鋭く現れている。これまで、日本を含めて、東洋の科学者の中で、これほど堂々と科学研究に対する思想を述べることでできた人はいないであろう。実験物理学を志す人間にとって、彼の文章は、いつ読んでも新鮮な力を与えてくれる。

最後に私がどうしても触れておきたい本は、数学者 岡 潔の「日本のこころ」である。彼の随筆集は「春宵十話」、「風蘭」等の他の書名で出版されていたが、この本はそれらをまとめ、講談社文庫から出版されたものである。彼の思想が明快に書かれており、読む人に感動を与える。彼は「情緒が頭を作る」とし、教育環境の大切さを主張する。また、日本民族には民族的情緒の色どりがあると言っている。この本の中で、彼自身の一生と、彼の数学研究についても触れており、「発見の鋭い喜び」ということを述べている。彼は、この言葉は寺田寅彦先生の文章から借りたものだと付け加える。

いずれにしても、これらの本を通じて、我々日本人は、世界に誇る素晴らしい先人を持っていることを悟っていただきたいと思う。

(かがわ・きいちろう 共通教育第九部会長)

身近な異文化世界を訪ねてみませんか

今尾 ゆ き 子

大学時代という4年間のモラトリアムをどのように過ごしたらいいのか。入ったけれども希望が見えないまま毎日が過ぎ不安がつつてきた時、『新・学生時代に何を学ぶべきか』（1998 講談社）は、寝ころんで読み飛ばすのに手頃な本です。一読して「もうちょっと、頑張ってみようかな」と思ったら、この本からパワーをもらった証拠です。題名がカタイので一瞬構えてしまうが、内容は各界で活躍中の諸氏が学生時代をいかに過ごしたかといった体験談です。明石康・上野千鶴子・黒柳徹子・佐高信など多士済済。割り当て紙数わずか3～4ページに、暗中模索を繰り返した青春の日々が活写されています。自分の生き方を見つけるためには本を読み、という月並みな結論に至るものが多いけれど、その試行錯誤のプロセスが結構おもしろいのです。誰のものから読み出してもかまわない。みんな同じようにモガイテイタのだと、ひとまず安心して落ち着くことができるでしょう。

『新・学生時代に何を学ぶべきか』で、ノンフィクション作家の野村進が大学生活の閉塞感をうち破るためにフィリピンに留学したと書いていますが、彼の労作『コリアン世界の旅』（1996 講談社）も是非お勧めしたい本のひとつです。大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した本書は在日韓国・朝鮮人パワーの実態を描いたものです。美空ひばり、都はるみ、ビートたけし……。『紅白歌合戦』は、われわれがいなかったら成り立たないんですよ」と、にしきのあきらに言わしめたほど在日系が多い芸能界。焼き肉・パチンコそして靴・鞆製造業界と読み進んでいくうちに、日本人の一番身近にありながら実に見えにくい在日系の人々(invisible minority)の存在が確かな形をとって次々に目の前に現れてきます。経営者の6～7割が在日といわれるパチンコ産業の総売り上げ額が自動車産業をはるかに越える35兆5千億円という

現実。どこでも見かけるキャスター付スーツケース。それを考案したのも済州島出身のコリアンジャパニーズだった等々。著者自身が「困難の多い取材と執筆ではあったが、・・・蒙を啓かれることばかりであった」とあとがきで述べているように、ページを繰る毎に「知らなかった、そうだったのか」の連続で、目からウロコが落ちっぱなしです。

2002年9月17日の日朝首脳会談以来、家族を含めた拉致被害者の動向が報道されない日はありません。北朝鮮問題が取り上げられる度に、こうした在日韓国・朝鮮人の人々に思いがいてしまうのは私だけでしょうか。どうして、日本人は最も身近な異文化の存在に対して、きちんと向き合おうとしてこなかったのでしょうか。姜信子『ごく普通の在日韓国人』（1990 朝日文庫）は、「日本人でもない、韓国人でもない」在日の若い女性が日本という社会で普通に生きていくためのスタンスを模索し続け、民族・国籍・在日であることの意味を問う好著です。学校側の「親切な」助言に従って通称（日本名）を使い「隠している本名・国籍を気に」し続けた高校生活。東大に入り就職留年までしたけれど、かなわなかった新聞記者への夢。豊かさの中で育った在日三世の前に立ちはだかる就職差別の壁。日本社会の見えにくい様々な差別に対し挑んでは敗れ、それでもなお挫折と諦念の悪循環に陥らず「日本語人」としてのメッセージを発信し続けたいという著者の果敢な精神に脱帽です。在日系の若者の複雑に屈折した思いについては、父方の祖母が韓国系という鷺沢萌の『ケナリも花、桜も花』（1994 新潮社）がお勧めです。1993年1月から半年間、著者が学んだ延世大学校語学堂での語学留学日記ですが、そこで知り合った在日系学友たちの繊細な心情が大胆に描かれていて、興味深く一気に読んで了うこと請け合いです。

（いまお・ゆきこ 共通教育第十部会長）

福井大学附属図書館五十年のあゆみ

木村 幹 明

2002年8月に『福井大学五十年史』が刊行されました。この中の第5章には附属図書館の歴史も含まれています。しかし、編集方針の関係でその全てを記述することはできませんでした。

ここに『福井大学五十年史』を補完するものとして、施設・年表・統計などの資料を中心に附属図書館のあゆみを紹介します。

施設・設備の変遷

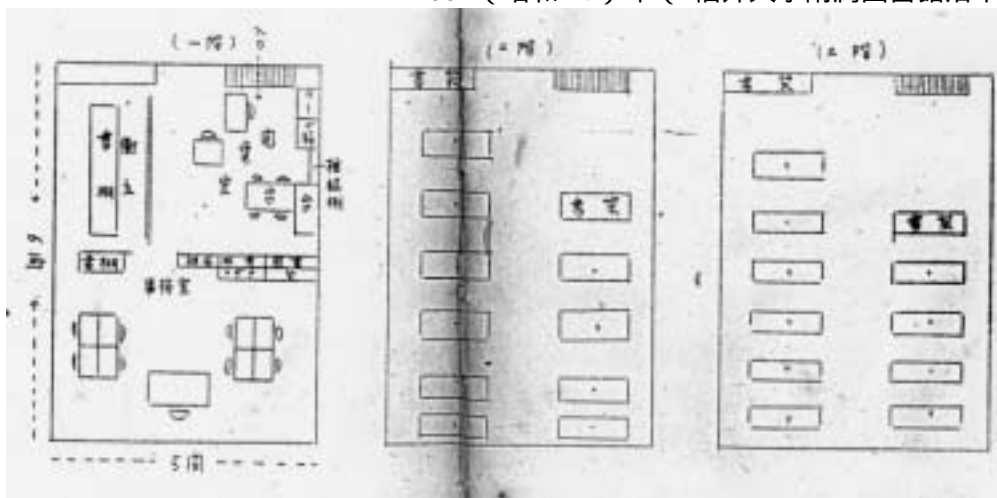
学芸学部分館平面図

1950(昭和25)年 (『福井大学附属図書館学芸学部分館概要』)



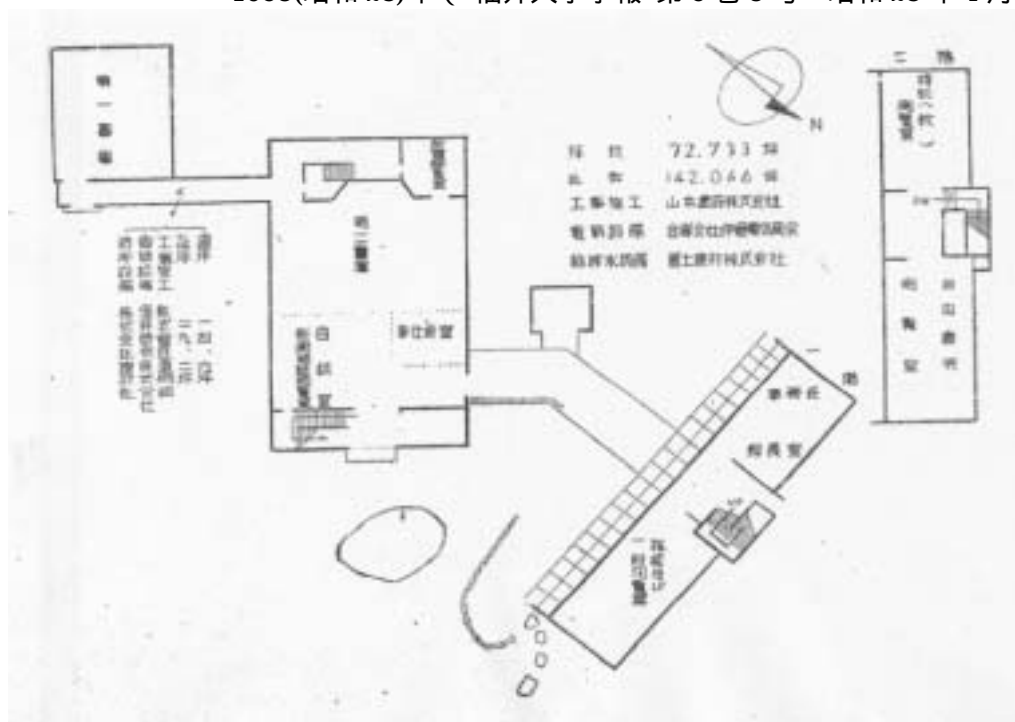
工学部分館平面図

1952(昭和27)年 (『福井大学附属図書館沿革誌』)



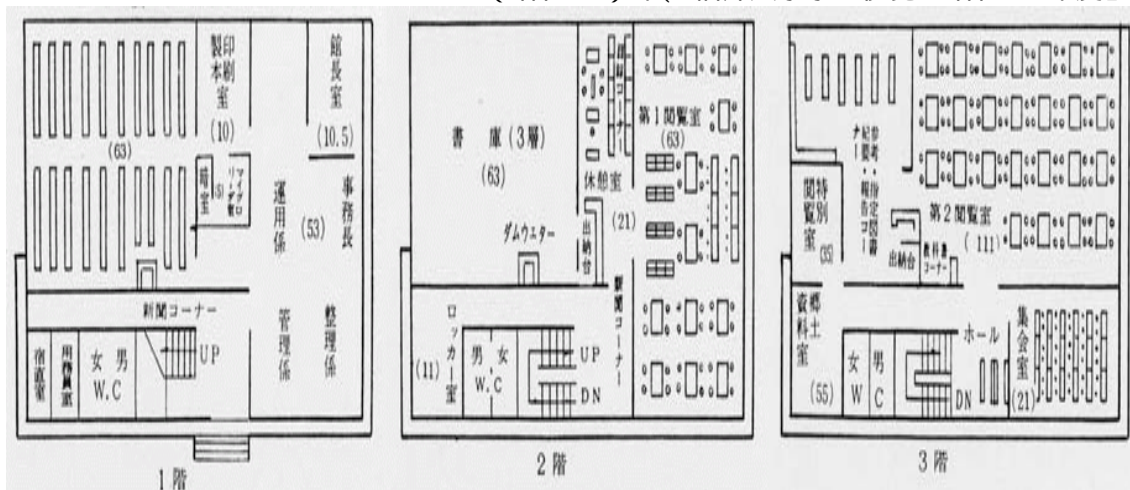
閲覧室棟竣工後 図書館平面図

1953(昭和 28)年 (『福井大学学報 第 5 卷 3 号 昭和 28 年 4 月号』)



新図書館平面図

1969 (昭和 44) 年 (『福井大学学生便覧 昭和 44 年度』)



附属図書館年表

西暦	元号	月	日	図書館関係事項
1945	昭和 20	7月	19日	福井市は米軍の爆撃を受け福井工業専門学校の建物はほとんど焼失したが、図書館と隣接の講堂は難を逃れた。福井市豊島中町にあった福井師範学校男子部は建物を焼失した。
1948	昭和 23	6月	28日	福井大地震で被災，被害甚大。図書館も書架倒壊等の被害を受ける。
1948	昭和 23	8月	14日	「好日文庫」受け入れ
1949	昭和 24	5月	31日	国立学校設置法(法律第 150 号)が公布され，福井大学が発足。福井大学附属図書館設置
1949	昭和 24	7月	1日	福井大学附属図書館学芸学部分館，学芸学部分教場分館，工学部分館の 3 分館制発足 附属図書館--学芸学部分館(庶務係，司書係)，学芸学部分教場分館(庶務係，司書係)，工学部分館(庶務係，司書係)
1949	昭和 24	8月	31日	初代附属図書館長に齋藤静学芸学部教授を発令
1951	昭和 26	2月	1日	「福井大学附属図書館委員会規程」制定
1951	昭和 26	3月	31日	「福井大学事務組織規程」制定 附属図書館(館長) 事務部(事務長)--管理係，整備係，奉仕係，分館(分館長) 司書係
1952	昭和 27	10月	16日	学芸学部分館は福井市の附属図書館(本館)に移転統合
1952	昭和 27	10月	16日	「福井大学附属図書館閲覧規則」制定
1952	昭和 27	11月	26日	福井大学附属図書館月報『橋』第 1 号を発行
1953	昭和 28	1月	31日	書庫と第 2 書庫(旧講堂)間の渡り廊下竣工
1953	昭和 28	3月	25日	附属図書館閲覧室(木造 2 階建 延 470 m ²)(座席定員 108 名)，渡り廊下，便所が竣工，旧講堂を書庫および出納台に改装
1953	昭和 28	6月	16日	事務組織の改組，2 係制となる。 附属図書館 事務部 管理係，整理係
1953	昭和 28	9月	26日	台風 13 号により日野川と九頭竜川の合流点付近の堤防決壊。26 日朝より 27 日にかけて本学施設浸水(床上 60～90cm，構内最深部 180cm 以上の水位)。図書約 5,000 冊が水浸しとなる
1953	昭和 28	12月	15日	『福井大学附属図書館増加図書目録第 1 号』を発行
1954	昭和 29	12月	27日	「道元文庫」受け入れ
1959	昭和 34	11月	1日	「高島文庫」受け入れ
1959	昭和 34	12月	2日	「福井大学附属図書館長選考規程」制定
1960	昭和 35			『高島文庫目録(郷土関係図書)』を発行
1960	昭和 35	4月	16日	運用係新設 附属図書館--事務部--管理係，整理係，運用係
1961	昭和 36	9月	16日	第 2 室戸台風の襲来により図書等に被害
1962	昭和 37	2月		『福井大学附属図書館月報』第 1 号発行
1964	昭和 39	10月	1日	『福井大学附属図書館月報』第 1 号発行
1966	昭和 41	3月	18日	附属図書館(鉄筋コンクリート造 3 階建 延 2,098 m ²)竣工
1966	昭和 41	4月	30日	『道元文庫目録』を発行
1966	昭和 41	5月	20日	『高島文庫目録 昭和 41 年 3 月』を発行
1966	昭和 41	11月	17日	文部省大学学術局大学図書館視察委員による実地視察
1967	昭和 42	9月	20日	『福井大学雑誌目録』を発行
1967	昭和 42	12月	6日	「福井大学附属図書館文献複写規程」制定
1968	昭和 43	2月	10日	『小林好日旧蔵書目録』を発行
1970	昭和 45	11月		『図書館報告 昭和 44 年度(第 1 号)』を発行(2 号より『年次報告書』と改題)
1971	昭和 46	3月	25日	附属図書館第 1 期増築(鉄筋コンクリート造 3 階建 延 1,010 m ²)
1972	昭和 47	11月	15日	『福井大学蔵書目録 第 1 編 総記，精神科学，歴史科学』を発行

西暦	元号	月	日	図書館関係事項
1973	昭和 48	3月	26日	『福井大学蔵書目録 第2編 社会科学, 自然科学, 工芸学』を発行
1973	昭和 48	5月	1日	『小島家文書目録』を発行
1973	昭和 48	5月	1日	参考係新設 附属図書館--事務部--管理係, 整理係, 運用係, 参考係
1973	昭和 48	5月	14日	「小島家文書」約4,000点の寄託を受ける
1973	昭和 48	10月	20日	『福井大学蔵書目録 第3編 産業, 美術, 語学, 文学』を発行
1975	昭和 50	4月	1日	附属図書館業務用電子計算機(FACOM230-15)稼働開始
1976	昭和 51	3月		附属図書館周辺緑化整備工事完成
1976	昭和 51	3月	31日	福井大学附属図書館報『かりん』第1号を発行
1976	昭和 51	4月	1日	『福井大学郷土資料目録』を発行
1979	昭和 54	2月	20日	『新訂・増補 小島家文書目録』を発行
1981	昭和 56	7月	12日	グリフィス・コレクション調査のため館清隆教育学部講師, 鈴間智弘附属図書館事務官をアメリカ合衆国ラトガーズ大学へ派遣(8月9日まで)
1982	昭和 57	3月	16日	附属図書館第2期増築(鉄筋コンクリート造3階建 延1142㎡)竣工, 総面積4,250㎡, ハンドル式集密書架および図書紛失防止装置(ブック・ディテクション・システム)設置
1982	昭和 57	3月	25日	文部省大型コレクション経費により『ハクリュート協会叢書』を購入
1982	昭和 57	7月	1日	グリフィス・コレクション調査のため館清隆教育学部講師, 平泉宏祥附属図書館事務官をアメリカ合衆国ラトガーズ大学へ派遣(8月29日まで)
1983	昭和 58	4月	1日	学術情報係新設 附属図書館--事務部--管理係, 整理係, 運用係, 参考係, 学術情報係
1984	昭和 59	3月	29日	『グリフィス文書目録稿』を発行
1984	昭和 59	5月		「日下部・グリフィス記念資料室」を特殊資料室内に併設
1985	昭和 60	5月		「財団法人日下部・グリフィス学術文化交流基金」より『グリフィス文書』を受贈
1987	昭和 62	4月	16日	情報処理センター開設に伴い同センターのFACOM M-360 経由で学術情報センターとN1ネットワーク経由で接続。閲覧システム, 目録システム, 検索システム稼働
1988	昭和 63	2月	16日	『グリフィス・コレクションの概要』を発行
1988	昭和 63	3月	28日	文部省大型コレクション経費により『古典文庫』を購入
1989	平成元	3月	30日	「吉村基金」設立
1992	平成 4	2月		附属図書館専用電子計算機(UNIX ワークステーション S-4/2)導入。後日, メーリング・リスト・サービスや光ファイリング・システムによるデータ提供サービスを試行
1993	平成 5	1月		日本初の図書館員が主催した図書館員のためのメーリングリスト「karin」運用開始
1993	平成 5	6月		福井大学自己点検・評価報告書『現状と課題』を発行。図書館業務についての分析を実施
1994	平成 6	3月	31日	附属図書館模様替え工事(身体障害者用エレベーター増設に伴う改修, 身体障害者誘導ブロック, スロープおよび身体障害者用便所設置)竣工
1994	平成 6	6月	21日	身障者用エレベーター工事竣工
1995	平成 7	2月		附属図書館業務用電子計算機(UNIX ワークステーション S-4/5)導入
1996	平成 8	3月		ATM対応データベースサーバ兼CD-ROMサーバ導入
1996	平成 8	4月		CA on CD, ERIC, 科学技術文献速報 CD-ROM, 雑誌記事索引 CD-ROM 等の各種データベース提供開始
1996	平成 8	5月	7日	電子メールによる利用者サービス開始
1996	平成 8	6月	6日	インターネット上でWWWによる図書館ホームページを公開
1996	平成 8	9月		『福井大学附属図書館将来構想第一次報告書』を発行
1996	平成 8	3月	28日	文部省大型コレクション経費により『ドイツ官報及び議会速記録集成』を購入

西暦	元号	月	日	図書館関係事項
1997	平成 9	5月	14日	「福井大学附属図書館利用規程」を全面改正，本学卒業生・元職員に対し資料の貸出を開始
1997	平成 9	10月	15日	福井大学附属図書館利用者ホームページ「user」による情報提供開始
1997	平成 9	12月	11日	「福井大学附属図書館図書館資料収集方針」および「福井大学附属図書館図書館資料収集保存基準」制定
1999	平成 11	3月	8日	附属図書館業務用電子計算機(UNIXワークステーションS-7/7000Uモデル45)導入
1999	平成 11	4月	1日	事務組織再編 附属図書館--事務部--総務係，図書情報係，雑誌情報係，情報サービス係，電子情報係
1999	平成 11	4月	9～15日	共通教育科目「大学教育入門セミナー」の一環として図書館利用教育開始
1999	平成 11	7月	12日	学内共通経費により蔵書の本格的遊及入力開始(専任要員2名を採用)
1999	平成 11	11月		『福井大学 50周年記念 写真と年表』を発行
2000	平成 12	4月	1日	小平俊之附属図書館長，附属図書館長として最初の福井大学評議員となる
2001	平成 13	4月		外国雑誌目次データベース検索システム(SwetScan)稼動
2002	平成 14	3月		目録カード検索システム稼動
2002	平成 14	3月		海外衛星放送受信システム設置
2002	平成 14	4月	1日	約 2,000 タイトルの電子ジャーナル提供開始(Elsevier，Blackwell，Springer)
2002	平成 14	7月		共通教育科目「情報処理基礎」に参画，本格的な情報リテラシー教育開始
2002	平成 14	8月	20日	『福井大学五十年史』を発行

規程等一覧

制定日	規程等名
1951(昭和 26)年 2月 1日	「福井大学附属図書館委員会規程」制定
1952(昭和 27)年 10月 16日	「福井大学附属図書館閲覧規則」制定
1959(昭和 34)年 12月 2日	「福井大学附属図書館館長選考規程」制定
1962(昭和 37)年 10月 1日	「福井大附属図書館文献複写取扱内規」制定
1963(昭和 38)年 6月 12日	「福井大学附属図書館閲覧規程」制定(昭和 27年 10月 16日 福井大学附属図書館閲覧規則廃止，福井大附属図書館文献複写取扱内規廃止)
1966(昭和 41)年 1月 26日	「福井大学附属図書館規程」制定
1966(昭和 41)年 1月 26日	「福井大学附属図書館利用規程」制定(昭和 38年 6月 12日 福井大学附属図書館閲覧規程廃止)
1967(昭和 42)年 12月 6日	「福井大学附属図書館文献複写規程」制定
1968(昭和 43)年 11月 9日	「福井大学図書館資料物品管理事務取扱要領」制定
1968(昭和 43)年 11月 9日	「福井大学図書館資料不用決定取扱基準」制定
1968(昭和 43)年 11月 13日	「福井大学図書館資料の不用決定基準」制定
1970(昭和 45)年 11月 9日	「福井大学図書館資料物品管理事務取扱要領」制定(館長決裁)
1976(昭和 51)年 10月 13日	「福井大学附属図書館利用規程」制定(昭和 41年 1月 26日 福井大学附属図書館利用規程廃止)
1978(昭和 53)年 1月 30日	「福井大学附属図書館利用規程実施要項」制定
1989(平成 1)年 11月 8日	「福井大学附属図書館文献複写料金徴収猶予実施要領」制定
1995(平成 7)年 5月 15日	「福井大学附属図書館将来構想検討委員会要項」制定(附属図書館長裁定)
1997(平成 9)年 5月 14日	「福井大学附属図書館利用規程」全部改正
1997(平成 9)年 5月 14日	「福井大学附属図書館利用規程実施要項」制定(附属図書館長裁定)
1997(平成 9)年 12月 11日	「福井大学附属図書館図書館資料収集方針」制定(附属図書館長裁定)
1997(平成 9)年 12月 11日	「福井大学附属図書館図書館資料収集保存基準」制定(附属図書館長裁定)

図書館統計

西暦	元号	蔵書統計					開館日数	利用統計				文献複写		相互貸借		職員数			図書館資料購入費
		蔵書数	増加冊数					入館者数	貸出者数	貸出冊数	レファレンス	受付	依頼	貸出し	借受け	専任	臨時	計	
				購入	寄贈等	計													
		冊	冊	種	種	種	日	人	人	冊	件	件	件	件	件	人	人	人	千円
1950	昭和25	41,145					301			25,056									
1951	昭和26		2,672																
1952	昭和27		15,821				284		8,031	17,347									
1953	昭和28		2,897				300		8,490	18,730									
1954	昭和29	66,641	3,106			460			11,512	18,150						12		12	4,033
1955	昭和30	69,893	3,252			642			12,404	18,426						11	1	12	4,402
1956	昭和31	72,751	3,036			457			12,540	21,263						11	1	12	4,713
1957	昭和32	76,259	3,508			635			11,869	17,383						11	1	12	4,739
1958	昭和33	81,916	5,657			892			12,010	18,453						11	1	12	4,982
1959	昭和34	85,972	4,056			617			11,926	18,210						11		11	5,775
1960	昭和35	90,104	4,194			658			10,666	17,093						11	2	13	5,903
1961	昭和36	94,690	4,599			858			11,767	18,265						13		13	7,339
1962	昭和37	97,919	4,244			1,041			12,302	42,595						13		13	7,995
1963	昭和38	102,763	6,154			939			14,396	44,644						13		13	10,354
1964	昭和39	108,565	5,802			1,121			15,416	24,896						14	1	15	14,236
1965	昭和40	114,676	6,647	418	813	1,231			16,828	26,751						14	1	15	16,784
1966	昭和41	125,052	10,811	505	936	1,441			25,228	38,194						14	3	17	22,458
1967	昭和42	134,682	3,883	507	785	1,292			35,898	52,583						14	3	17	26,752
1968	昭和43	143,320	9,323	550	1,341	1,891			37,720	55,001						14	3	17	25,024
1969	昭和44	152,208	9,442	657	798	1,455			29,088	44,333						14	3	17	30,583
1970	昭和45	161,220	9,687	717	1,160	1,877			23,950	36,271						14	4	18	28,931
1971	昭和46	172,952	12,461	1,145	1,304	2,449			26,171	40,359						14	4	18	41,667
1972	昭和47	182,749	10,650	3,895	1,455	5,350			30,156	38,797	828	26	345	1	2	14	5	19	43,288
1973	昭和48	191,383	10,205	1,042	727	1,769			26,541	36,002	2,159	53	335	0	28	16	5	21	59,158
1974	昭和49	202,739	10,265	1,890	840	2,730			20,199	34,304						16	7	23	61,080

西暦	元号	蔵書 統計					開館日数	利用統計				文献 複写		相互 貸借		職員 数			図書館資 料購入費
		蔵書数	増加冊数					入館者数	貸出者数	貸出冊数	レファ レンス	受付	依頼	貸出し	借受け	専任	臨時	計	
				購入	寄贈等	計													
1975	昭和50	212,504	10,035	1,149	1,622	2,771			22,195	34,459					15	7	22	68,076	
1976	昭和51	223,233	10,950	1,163	1,577	2,740			17,822	33,250					16	5	21	71,740	
1977	昭和52	235,781	12,892	1,199	1,606	2,805			18,571	35,304					16	4	20	72,310	
1978	昭和53	249,131	13,639	1,220	1,605	2,825			13,784	23,788					16	4	20	81,125	
1979	昭和54	262,586	13,455	1,208	1,824	3,032			13,873	23,886					17	4	21	78,848	
1980	昭和55	274,675	12,502	1,130	1,840	2,970			13,063	23,103					15	6	21	93,367	
1981	昭和56	286,161	11,486	1,218	2,081	3,299			9,273	16,268					15	6	21	100,404	
1982	昭和57	296,724	11,510	1,314	2,115	3,429	275	137,220	10,263	18,536	4,492	966	1,432	73	42	15	7	22	106,271
1983	昭和58	307,058	10,334	1,319	2,082	3,401	284	137,335	10,354	18,874	4,067	889	1,136	12	31	15	6	21	107,675
1984	昭和59	317,115	10,057	1,264	2,243	3,507	283	136,508	9,019	16,442	5,729	1,035	1,520	11	34	14	6	20	101,500
1985	昭和60	326,924	9,938	1,298	2,224	3,522	286	151,239	8,722	15,817	5,679	1,037	1,661	19	63	14	6	20	102,772
1986	昭和61	334,159	7,871	1,282	2,162	3,444	280	142,014	9,065	16,175	3,360	1,059	1,351	5	111	14	7	21	98,211
1987	昭和62	342,658	8,499	1,257	2,165	3,422	286	148,944	8,914	16,181	3,402	1,174	1,113	14	47	14	6	20	94,729
1988	昭和63	353,190	10,534	1,344	2,139	3,483	282	142,706	7,935	14,484	4,402	1,218	1,471	20	67	14	6	20	106,204
1989	平成1	362,198	9,017	1,287	2,150	3,437	282	147,376	7,200	13,036	1,504	1,083	1,760	36	75	14	6	20	96,446
1990	平成2	371,014	8,816	1,637	2,408	4,045	281	158,913	7,848	14,399	1,346	1,473	1,938	71	84	13	7	20	103,064
1991	平成3	378,837	7,823	1,282	2,619	3,901	283	144,061	7,672	14,028	954	1,085	2,021	35	40	13	8	21	98,800
1992	平成4	387,805	8,968	1,256	2,771	4,027	273	139,172	7,326	13,852	1,848	1,678	2,337	47	99	12	8	20	107,773
1993	平成5	397,478	10,320	1,231	2,823	4,054	254	131,564	7,748	14,545	1,726	1,843	2,322	62	110	12	8	20	117,307
1994	平成6	407,405	9,927	1,211	3,077	4,288	267	138,474	10,484	19,917	1,714	1,664	2,511	67	134	12	8	20	107,020
1995	平成7	418,317	10,912	1,236	2,812	4,048	273	143,435	13,135	24,306	2,007	1,031	2,394	32	201	12	8	20	115,131
1996	平成8	427,337	9,020	1,275	2,933	4,208	284	139,725	12,374	23,100	2,063	2,059	2,478	61	189	12	8	20	112,831
1997	平成9	434,037	8,451	1,284	2,812	4,096	289	148,132	11,303	21,531	2,489	2,261	2,852	105	242	12	8	20	126,164
1998	平成10	441,808	7,771	1,267	2,879	4,146	284	145,281	11,315	22,096	3,020	2,641	3,287	150	319	11	8	19	124,065
1999	平成11	440,652	8,463	1,273	3,013	4,286	287	129,558	10,016	19,882	4,137	2,450	3,225	178	408	11	12	23	129,948
2000	平成12	449,327	8,675	997	2,447	3,444	272	117,031	9,515	18,168	4,096	1,542	3,334	156	385	12	12	24	115,290
2001	平成13	456,688	8,302	985	2,813	3,798	278	135,979	10,709	20,616	3,958	1,813	3,558	184	367	11	12	23	105,332

上海見聞記

岡 部 歌 子

昨年まで、教育地域科学部の講座事務で仕事をしていたこともあり、2002.12.5～10まで蘇州・上海に総勢22人の研修旅行に参加させてもらいました。

この研修旅行というのは、福井大学の美術科の学生・院生・教員・OBの方々が上海博物館に於いて開催された故宮博物院所蔵名品展の視察を主な目的とする研修でした。

12月5日(木)

12月だと言うのに旅行者でいっぱい名古屋空港を出発。手荷物検査も厳重で飛行機も満席の状態。約2時間で5時ごろ上海浦東国際空港に到着。空港では警備員が厳重にパトロールしており少し緊張。

旅行社が用意をしたバスに乗り込み最初の研修先の蘇州へ向けて出発。暗くなりかけた高速を”となりのトトロ”の猫バスのように猛スピードで約2時間。レストランで待望の食事です。まさに山盛り・てんこ盛りの中華料理です。中国に無事着いた事、また明日からの研修を有意義にするようにとの宮崎先生の挨拶の後、乾杯。そして22人の胃袋をいっぱいにして1人あたり46元(700円)ほど日本で考えられないお値段です。

12月6日(金)

午前中は生憎の雨の中、蘇州四大名園のひとつである留園に行きました。園内の楼閣が長い回廊で結ばれている庭園は自然が生み出した芸術。学生さんも神秘的な顔で見歩いていました。午後上海に向けて移動。私にとってはどこか昔の田舎の風景を思い出す蘇州で、もう一度訪れてみたいと思いました。

この日の夕食はまたまた中華料理三昧。昨

日の蘇州での中華料理とは少し味付けが違っていましたが、ここでも目いっぱいいただきました。満足満足。

12月7日(土)

上海1日目は上海博物館の視察。しかし博物館に行ってみると長蛇の列。並んでいるだけで時間がとられそうなので、時計台のある英国風の古い建物で、以前は上海競馬会の建物として使われていたと言う上海美術館を見学。4000点あまりの収蔵品の展示と、内外の美術・写真等の展示がなされており、その中には楊先生の作品が常設されていました。

疲れたので、コーヒーでも飲もうと思い喫茶店に入りましたが言葉が通じません。やがて身振り手振りでコーヒーセットが安いことが分かり一段落。安いといっても23元(350円)ほどでしたから中華料理に比べれば大変高い物です。

上海博物館は上海の政治、文化の中心地である人民広場にあり、小雨の中を1時間ほど並んでようやく入ることができました。風格を備えた4階建ての館内には貴重な文物が12万点以上、蔵書は20万冊以上あるそうです。今回の視察の目的である”晋唐宋元書画国宝展”が開催(12/1～1/6)されており、故宮博物院所蔵の物22件、上海博物館所蔵の物32件、遼寧省博物館所蔵の物18件と膨大な数です。閉館までの4時間みんな思い思いに上海博物館を視察しました。2階にある陶磁器館では焼物の釜まで紹介されているのでどのように作られているのかも分かります。また4階の少数民族工芸館の民族衣装に圧倒され、私にとって幸いなことには、王羲之の書があ

ったことです。本物だぁ～と感激しました。

12月8日(日)

朝、上海の郊外にある上海大学に向かいました。バスからは、林立する上海の高層ビル群を眺め、少し郊外に向かうと開発の進む市街地で、昔ながらの街並みは消えようとしていました。

上海大学は広大な敷地の中にあり、22 学院、47 学部、71 学科、教職員約 3000 人を有する総合大学です。訪問した美術大学院では、高校生が書いた絵画等の展示会が催されており、またガラス細工の工房では、学生が黙々と研究をしている様子を見学して 2 時間あっという間に過ぎてしまいました。午後からは上海にもどり自由行動。4 班にわかれそれぞれ研修・買物・見学に費やし、私は楊先生たちと一緒に今にも崩れそうなレンガの家並を見てまわり、高層ビルとのギャップに驚かされたものでした。

夕食は待ちに待っていた上海ガニです。まず上海カニはお客様に見せてからゆでるそうです。ゆであがった上海ガニは真っ赤です。むちいーとしていて本当に美味。

その夜、安平街自由市場に出かけました。そこは狭い路地に気が遠くなるほどの数の露店がならんでおり、見て回るだけでとても楽しいのですが、夜は少し不気味なところでした。

12月9日(月)

最終日の研修先は豫園です。豫園の「豫」は「愉」に通じ、すなわち「楽しい園」と言

う意味だそうです。狭いところでしたが、芸術品のように細かい工夫が多数なされている庭園を見て歩き、緑波池の中にある湖心亭と九回折れて渡る九曲橋で豫園を堪能しました。豫園の近くで行列ができるほどの人気のあるアツアツの小籠包は本当においしかったです。

中国最後の食事中華料理でした。今までに食したことのないものを楊先生に選んでいただいたところ、日本にはない食材を食べてしまったのです。ですが中国ではふつつふつつ。満足の晩餐会でした。ところで、中国で何度も食事をしたのですが、お店に入っても笑顔が無いのです。”いらっしゃいませ”という言葉すらありません。何だか変な気分が日本との違いを感じました。その夜、租界時代の高層建築の残る外灘に夜景を見に行きましたが、対岸の高層ビルの灯りはすばらしいものでした。近くのホテルの喫茶店でジャズを聴きながらのコーヒはまた格別なものでした。

12月10日(火)

朝、上海のホテルを出発。名古屋空港に 3 時(時差 1 時間)に到着。雪の降る北陸に高速バスで無事帰福。

以上が美術科の皆さんと行った研修旅行です。最後に皆さん楽しい 6 日間を一緒に過ごさせていただき本当に有難うございました。特に楊先生にはお世話になりました。

(おかべ・うたこ 総務係)

お知らせ

小島家文書の目録，画像を検索・閲覧できます

このたび，小島家文書の目録を Web から検索できる小島家文書データベースを構築しました。（利用申請を行うことにより，文書の画像も閲覧することができます。）

本目録は，小島武郎氏から寄託された越前国坂井郡野中村（現，福井県坂井郡三国町）の江戸から昭和初期にかけての「小島家文書」を収録したものです。

アクセス方法

「福井大学附属図書館ホームページ」(<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp>) から「小島家文書データベース」を選択



目録検索画面



目録詳細画面

CD/DVD-ROM サーバシステムが更新されました

従来，図書館では，学内 LAN を経由して，CA on CD (Chemical Abstracts on CD-ROM) 等の CD-ROM データベースを利用することができる CD-ROM サーバシステムを稼働させ運用してきましたが，年数の経過とともに故障も頻発し，毎年増え続けるデータベース CD-ROM の収容能力にも限界をきたしたために，このほど，CD-ROM だけでなく，これから増えることが予想される DVD-ROM データベースも利用することができる CD/DVD-ROM サーバシステム（700 連装チェンジャー装備）を導入しました。

このシステムは，約 700 枚の CD-ROM 又は DVD-ROM を収納することができます。従来カウンターで利用する毎に借りていた CD-ROM 等は，このシステムに収納させ，サーバにアクセスすることによって利用することができます。（ただし，ネットワーク対応版以外は図書館のパソコンからしか利用できません）

アクセス方法（CA on CD）

「福井大学附属図書館ホームページ」(<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp>) から「福井大学図書館で提供しているデータベース」 「CA on CD 検索システム」を選択



利用できる電子ジャーナルが増加!!

本学では、昨年度から電子ジャーナルに対する予算処置がとられ、大手3社の有料電子ジャーナルを導入し好評を得ておりましたが、15年度におきましては、各関係者のご努力及び電子ジャーナルに対する学内全体の理解のもとに、学内的財源確保ができ、また、文部科学省からは「情報通信」「ナノテクノロジー・材料」2分野の電子ジャーナル導入のための予算措置もとられ、利用できる電子ジャーナルのタイトル数を大幅に増やすことができました。

ぜひアクセスしてご利用ください。

<利用できる電子ジャーナル>

- ・ Elsevier (SD フリーダムコレクション) 約 1,400 タイトル
 - ・ Springer (LINK) 約 430 タイトル
 - ・ Blackwell (SSH コレクション[人文・社会系分野]) 約 260 タイトル
(STM コレクション[自然科学系分野]) 約 330 タイトル
 - ・ ProQuest (Academic Research Library) 約 1,800 タイトル
 - ・ IEEE Computer Society 20 タイトル
 - ・ ACM (Association for Computing Machinery) 約 260 タイトル
 - ・ ACS (American Chemical Society) 24 タイトル
- (網掛けは 15 年度新規契約、ただし、Elsevier はコンプリートコレクションからの変更契約)

以上、約 4,500 タイトルの電子ジャーナルが利用可能となります。

アクセス方法

「福井大学附属図書館ホームページ」(<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp>) から「福井大学で利用できる電子ジャーナル」を選択

福井大学教員著書コーナーを設置しました

この度、2階閲覧室に教員著書コーナーを設置しました。このコーナーには、本学の教員から寄贈のあった著書（図書に限定）を最大2冊まで配架してあります。ご寄贈頂いた著書は、原則として館内閲覧としますが、複数冊数をご寄贈いただいた場合、2冊目は通常どおり貸出しを行います。

本学図書館を利用する学生や一般の方に福井大学の研究成果を知っていただくためにも、著作物を上梓されたときは、是非とも図書館へご寄贈いただくようお願いします。

寄贈著書一覧

寄贈者	書名	著者及び執筆者	発行所	冊数
大下 邦幸 (言語教育)	コミュニケーション・クラスの理論と実践	大下邦幸 編著	東京書籍	1
	英語授業のコミュニケーション活動	大下邦幸 他編著	東京書籍	1
	コミュニケーション能力を高める英語授業：理論と実践	大下邦幸 編著	東京書籍	1
	日本における英語教育の将来	大下邦幸 他執筆	全国英語教育学会	2
	これからの英語教育：研究と実践	大下邦幸 他執筆	東京書籍	1
高山 善行 (言語教育)	日本語モダリティの史的研究	高山善行 著	ひつじ書房	1
内田 高峰 (理数教育)	有機化学の基礎	内田高峰 他著	朝倉書店	1
	化学の目でみる物質の世界	伊佐公男, 内田高峰 他共著	内田老鶴園	1
	光高圧機器 高圧研究機器設計図集	内田高峰 他執筆	高圧研究機器設計図集世話人	1
清水 史郎 (芸術・保健 体育教育)	科学的スキー上達法：エキスパートがくやしがるやさしいターン術	清水史郎 著	講談社	1
	スキーの科学：ロボットが教えてくれた回転の秘密	清水史郎 著	光文社	1
	スキーへようこそ（学校体育実技指導資料第6集）	清水史郎 他作成協力	東洋館出版社	1
橋本 龍雄 (芸術・保健 体育教育)	紙パックでひらく環境教育	橋本龍雄 監修	教育出版	10
	大阪発! 子どもの世界から…：もっと楽しく!	橋本龍雄 監修	教育出版	5
村野井 均 (発達科学)	子供の発達とテレビ	村野井均 著	かもがわ出版	1

寄贈者	書名	著者及び執筆者	発行所	冊数
戎 利光 (生涯学習)	子どものからだの健康科学	戎利光 著	不昧堂出版	1
	ライフスタイルと健康の科学	戎利光 他著	不昧堂出版	1
	わかりやすい健康の生理学・衛生学	戎利光 著	不昧堂出版	1
辻 和彦 (異文化交流)	その後のハックルベリー・フィン：マーケット ウェインと十九世紀アメリカ社会	辻和彦 著	溪水社	1
伊藤 勇 (行政社会)	相互行為の社会心理学	伊藤勇 他編著	北樹出版	1
中村 圭佐 (附属教育実践総合センター)	教室の中の気がかりな子	中村圭佐, 氏家靖 浩 編	朱鷺書房	2
氏家 靖浩 (附属教育実践総合センター)	臨床教育学序説	氏家靖浩 他執筆	柏書房	1
	メンタルヘルス・クライシス：総特集（精神 医療 第4次27号総特集）	氏家靖浩 他執筆	批評社	1
松本 芳紀 (建築建設)	建築構造力学 1（新しい建築工学4）	松本芳紀 他共著	森北出版	2
	建築構造力学 2（新しい建築工学5）	松本芳紀 他共著	森北出版	2
本多 義明 (建築建設)	福井みちづくりの歴史	本多義明 他編著	地域環境研 究所	1
	福井まちづくりの歴史	本多義明 他編著	地域環境研 究所	1
	福井公共交通の歴史	本多義明 他編著	地域環境研 究所	1
	交通工学（土木教程選書）	本多義明 他共著	鹿島出版会	1
	新編土木計画学	本多義明 他編著	国民科学社	1
	雪とつきあう福井の歴史	本多義明 他編著	地域環境研 究所	1
上島 孝之 (生物応用 化学)	産業用酵素	上島孝之 著	丸善	1
	酵素テクノロジー	上島孝之 著	幸書房	1
寺田 聡 (生物応用 化学)	ティッシュエンジニアリングの展望：再生医 療関連の産業化動向・日米比較	寺田聡 他執筆	三恵社	2
小高 知宏 (知能システム)	基礎からわかる TCP/IP アナライザ作成とパ ケット解析：Linux/FreeBSD 対応	小高知宏 著	オーム社	1
	基礎からわかる TCP/IP Java ネットワークプロ グラミング	小高知宏 著	オーム社	1
	はじめて学ぶ C 言語	小高知宏 著	ナツメ社	1
桜井 哲真 (大学院工学 研究科)	デジタル情報学概論：21 世紀, IT 社会理 解のために	桜井哲真 他著	共立出版	2

遡 及 入 力 報 告

平成 15 年 1 月 31 日現在

年 度	図 書	製本雑誌	合 計	備 考
平成 9 年度	11,459		11,459	整理係（現図書情報係）で入力開始
平成 10 年度	10,409		10,409	
平成 11 年度	13,322	10,538	23,860	雑誌情報係で製本雑誌の入力開始
平成 12 年度	13,144	28,567	41,711	
平成 13 年度	14,758	23,367	38,125	製本雑誌入力終了
平成 14 年度	21,161	2,511	23,672	
合 計	84,253	64,983	149,236	

（平成 11 年 7 月から遡及入力 5 ケ年計画により 4 時間パート 2 名採用）

附属図書館の書庫内図書の入力状況

入力済	哲学	哲学，心理学，倫理学，宗教
	歴史	歴史，伝記，地理
	社会科学	政治，法律，経済，統計，社会，教育，風俗習慣，国防
	産業	農林水産業，商業，運輸，通信
	文学	日本文学，中国文学，英米文学，ドイツ文学，フランス文学， ロシア・ソヴィエト文学，その他
	製本雑誌	和雑誌，洋雑誌
入力中	芸術	美術，音楽，演劇，スポーツ，諸芸，娯楽
未入力	総記	図書館，図書，百科事典，一般論文集，逐次刊行物 団体，ジャーナリズム，叢書
	自然科学	数学，理学，医学
	技術・工学	工学，工業，家政学
	言語	日本語，中国語，英語，ドイツ語，フランス語，ロシア語， その他

2003年 新規購入・中止雑誌リスト

< 洋雑誌 >

新規購入雑誌

雑誌名	所在
American economic review	行政社会
CA selects: high performance liquid chromatography	生物応用科学
Econometrica	行政社会
Flash art international	芸術・保健体育教育
International journal of bifurcation and chaos in applied science and engineering	知能システム工学
Journal of law & economics	行政社会
Journal of regulatory economics	行政社会
Journal of transport economics and policy	行政社会
Journal of vocational home economics education	生活科学教育
Litterature	異文化交流
Neural computing	知能システム工学
Quarterly journal of economics	行政社会
Turnen & sport	生涯学習

購入中止雑誌

雑誌名	所在
Applied spectroscopy	生物応用科学
Asymptotic analysis	理数教育
Automatica	知能システム工学
Biotechnology and bioengineering	生物応用科学
Communications on pure and applied mathematics	理数教育
Computational linguistics	知能システム工学
Ecological psychology	教育実践センター
Engineering fracture mechanics	機械工学科
Financial accountability & management in governments	行政社会
Functional analysis and its applications	理数教育
Housing studies	地域環境
IEEE transaction on visualization and computer graphics	情報メディア工学科
International journal of heat and mass transfer	機械工学科
Japanese journal of mathematics	理数教育
Journal of accounting literature	行政社会
Journal of adhesion science and technology	材料開発工学科
Journal of applied physics	電気・電子工学科
Journal of applied statistics	地域環境
Journal of functional analysis	理数教育
Journal of macromolecular science Pt.A: Pure and applied chemistry	図書館
Journal of macromolecular science Pt.B: Physics	図書館
Journal of materials processing technology	機械工学科
Journal of medical systems	知能システム工学
Journal of pure and applied algebra	理数教育
Language teaching	異文化交流
Nikkei weekly	異文化交流
Optics letters	電気・電子工学科
Pacific journal of mathematics	理数教育
Physical chemistry, chemical physics	図書館
Russian mathematical surveys	理数教育
Skiing	芸術・保健体育教育
Snowboarder	芸術・保健体育教育
Survey of current business	社会系教育
TENSOR	物理工学科
Town and country planning	建築建設工学科
Die Zeit	異文化交流

< 和雑誌 >

新規購入雑誌

雑誌名	所在
DTM magazine	情報メディア工学科
Linux World	総合情報処理センター -
運輸政策研究	行政社会
応用物理教育	アドミッションセンター -
音楽音響研究会資料	情報メディア工学科
化学と教育	アドミッションセンター -
教育科学 国語教育(月刊)	言語教育
教育展望	芸術・保健体育教育
精神神経学雑誌	教育実践センター -
大学の物理教育	アドミッションセンター -
中国現代当代文学研究	異文化交流
道路交通経済	行政社会
トランジスタ技術 Special	情報メディア工学科
日本建築学会環境系論文集	建築建設工学科
日本語文法	言語教育
日本社会精神医学会雑誌	教育実践センター -

購入中止雑誌

雑誌名	所在
ASAHIパソコン	発達科学
DIGITAL BUYER	電気・電子工学科
DOS-V/POWER REPORT	電気・電子工学科
MAC LIFE	知能システム工学
"	教育実践センター -
OPEN DESIGN	機械工学科
"	情報メディア工学科
"	知能システム工学
"	総合情報処理センター -
エキノックス	異文化交流
延河	異文化交流
からだの科学	生活科学教育
金曜日/週刊	異文化交流
経済月報	社会系教育
建築と社会	地域環境
構造工学論文集	建築建設工学科
旬刊経理情報	行政社会
消費者/月刊	生活科学教育
消費生活年報	生活科学教育
情報処理学会研究報告 デジタル・ドキュメント DD	電気・電子工学科
すくすくネットワーク	生活科学教育
生活行政情報	行政社会
造景	地域共同研究センター -
"	建築建設工学科
総合交通	建築建設工学科
地方史研究	教育実践センター -
テレパル	芸術・保健体育教育
電子情報通信学会技術研究報告 ヒューマン コミュニケーション HCS	電気・電子工学科
日本語教育	異文化交流
フィールドパワ-システム	知能システム工学
プラスチック	材料開発工学
プロセスア - キテクチュア	建築建設工学科
文士哲	言語教育
ベビーエイジ	生活科学教育
ポリファイル	材料開発工学
マタニティ	生活科学教育
利用教育委員会通信	図書館事務用
歴史学研究	教育実践センター -

図書館この一年

【会議関係】

< 附属図書館委員会 >

14. 5.14 協議事項
 (1) 平成13年度図書購入費執行状況について
 (2) 平成14年度図書資料(大型コレクション)収書計画調書について
 (3) 電子ジャーナルの整備体制について(案)
14. 7.17 協議事項
 (1) 平成14年度図書購入費予算配分(案)について
 (2) 平成14年度共同利用資料の選定について
 (3) 本学教員著書コーナーの設置について
 (4) 研究室外図書貸出について
- 14.10.15 協議事項
 (1) 図書館利用者アンケート調査について(案)
 (2) 図書館の中期目標・中期計画について
- 14.11.19 協議事項
 附属図書館中期目標・中期計画ワークシート(案)について
- 14.12.24 協議事項
 (1) 福井大学における電子ジャーナルの整備方策について(提言)
 (2) 図書館利用に関するアンケート結果について
15. 2.13 協議事項(持ち回り附属図書館委員会)
 電子ジャーナル検討WGの再立ち上げについて

< 附属図書館将来構想検討委員会 >

- 14.11.19 協議事項
 附属図書館中期目標・中期計画ワークシート(案)について

< 五十年史編集委員会 >

14. 4.15 協議事項
 (1) 「機器分析センター」原稿について
 (2) 「電気・電子工学科」原稿について
 (3) 「工学部の歴史」原稿について
 (4) 「あとがき」について
 (5) 五十周年記念館(仮称)の展示パネルについて
14. 7.11 協議事項
 執筆者に対する謝意について

< 館 外 >

14. 4.25-26 第53回北信越地区国立大学図書館協議会
 (於: 福井市 中根館長・上木事務長出席)
14. 5. 8 平成14年度福井県図書館協会理事会・総会
 (於: 福井県立図書館 中根館長出席)
14. 5.21-22 平成14年度国立大学附属図書館事務部課長会議
 (於: 学術総合センター 上木事務長出席)

14. 6.25 平成14年度福井地区大学図書館協議会定例会議
 (於: 仁愛女子短期大学 西野総務係長出席)
14. 6.26-28 第49回国立大学図書館協議会総会
 (於: 鳥取市 中根館長・上木事務長出席)
14. 8.23 北陸地区国立大学附属図書館会計担当者会議
 (於: 富山医科薬科大学 西野総務係長, 岡部総務主任出席)
14. 8.28-29 電子ジャーナル・ユーザー教育担当者研修会
 (於: 大阪大学 木村情報サービス係長出席)
14. 8.30 平成14年度福井地区大学図書館協議会夏季研修会
 (於: 仁愛大学 中根館長外8名出席)
14. 9. 3-5 平成14年度目録システム講習会
 (於: 金沢大学 門情報サービス係主任出席)
- 14.10. 8 メタデータ・データベース共同構築事業説明会
 (於: 京都大学 田中圖書情報係長出席)
- 14.10.23-25 NAIST 電子図書館学講座
 (於: 奈良先端科学技術大学院大学 田中圖書情報係長出席)
- 14.10.31 -11.01 東海北陸地区著作権セミナー
 (於: 福井県民会館 西野総務係長外2名出席)
- 14.11. 7-8 平成14年度北信越地区国立大学図書館研修会
 (於: 新潟大学 岡部総務主任出席)
- 14.11.11-16 資料管理学研修会
 (於: 宮城県公文書館 木村情報サービス係長出席)
- 14.11.21-22 平成14年度北信越地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議
 (於: 富山医科薬科大学 上木事務長出席)
- 14.12. 4- 6 第15回国立大学図書館協議会シンポジウム
 (於: 九州大学 木村情報サービス係長出席)
15. 2.21 平成14年度福井県図書館関係職員研修会
 (於: 福井県立図書館 塩崎雑誌情報係長外4名出席)
15. 3. 4-6 第1回N I I 国際シンポジウム
 (於: 国立情報学研究所 田中圖書情報係長出席)

【主な出来事】

14. 4. 8 平成14年度新入生に対する図書館利用オリエンテーション
14. 4.16-22 大学教育入門セミナー
14. 8.20 『福井大学五十年史』刊行
14. 9.21 オープンキャンパス2002企画参加
 ・オリジナルの”しおり”を作ろう!
 ・小島家文書と古絵図展